『母校通信』2025秋，156号

関学生の課外活動を進化させる

近年、関学生の部活動・サークル活動を発展させるための大きな挑戦が始まった。2021年に発足したKGAD（関西学院大学競技スポーツ局, Athletic Department）の取り組みがそれである。さまざまな課外活動のうち、まず体育会を中心とするスポーツ活動がその対象になったが、これは文化系等の他の団体を軽視したからではなく、体育会の団体は組織面（OBOG会も含む）や指導面がしっかりしているので、その強みを活かして一連の改革を先導してもらうためである。

KGADは、課外活動としてのスポーツが学生の人間的成長を促す点にあらためて着目し、（体育会は大学外部の自治団体であるため）それらの活動を大学組織に公式に組み入れ、その教育面のガバナンス強化を図るものである。KGADの課題は、①安全性の確保、②健全性の確立、③正課教育との両立、④競技力の向上、⑤大学スポーツ界および地域社会への貢献、の5つだが、簡単に言えば「ケガなし、不祥事なし、留年なし、社会に愛される、強い関学スポーツ」ということだろう。

体育会には42部がある。このうち上の5つの観点を含む資格要件をクリアした30部＋体育会学生本部がすでにKGAD加入を果たし（2025.6.10現在）、大学としては数年内にすべての部が加入することを目指している。ちなみに、私が部長を務める体操部は残念ながら未加入である。

KGAD創設の準備として、勉学面では、「所定の取得単位数を満たさないと試合に出られない」等のアカデミック・エリジビリティー制度（Academic Eligibility, AEと略す）が2019年から始まった。例えば2021年入学の学年を4年間追跡調査し、AE制度に抵触した学生の比率を体育会学生とその他の学生で比較すると、下表のように体育会学生の方が好結果を残している（ただし成績不振による退部者の可能性を考慮すると、数字の解釈には慎重さが必要だろう）。なお、他年度の入学生についても結果はおおむね同様である。

	体育会学生	その他の学生
21年春	4.30%	5.20%
22年春	2.81%	4.17%
23年春	3.12%	4.27%
24年春	1.46%	4.33%

The Student's Union (1913). (度年二正大) 會 生 學

学院史編纂室所蔵『高等学部商科第2回卒業アルバム』より

さて、インターネットでも閲覧可能な『関西学院事典』によれば、学生自治組織としての体育会の起源は、1912年に発足した関西学院専門学生会（後の専門部学生会）の「運動部」にある。その後、第二次大戦中の紆余曲折を経て、46年に「運動総部」として再結成され、57年に「体育会」と改称した。90年代には商学部・社会学部が先駆けとなり、各学部にスポーツ推薦入試（試験名称は学部によって異なる）が導入された。その結果、競技レベルは大いに向上したものの、学業との両立に苦しむ学生も増え、これはその後の関学スポーツが抱える最大の課題の一つであり続けたのである。それゆえAE制度の成果は注目に値し、今後の発展が期待される。

しかしKGADという新組織を通じて体育会学生だけを教育面・資金面で優遇するのは不公平である。KGADの手法をそのまま適用することはできないが、将来的には同様の取り組みが、体育会以外の団体（文化総部、応援団総部、等々）へも何らかの形で広がることを私は願う。ちなみに、文化総部の起源は体育会と同じく1912年発足の「社交部」、応援団総部は46年発足の「応援団」である。

社会環境の変化に適応し、課外活動を進化させ、多彩で優れた学生を世に送り出すこと。教育面における本学の活路の一つは、ここにあるように思われる。

経済学部教授、前学生部長（2020-2024年度）
本郷（ほんごう） 亮（りょう）